

〈研究ノート〉大学における体験型科目を通じたキャリア意識の向上：「キャリアサポート実習」を例にして

OGOH, Yumiko / TAZAWA, Minoru / 田澤, 実 / 淡河, 由満子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / Lifelong Learning and Career Studies

(巻 / Volume)

16

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

102

(発行年 / Year)

2018-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021437>

大学における体験型科目を通じた キャリア意識の向上

—「キャリアサポート実習」を例にして—

法政大学キャリアデザイン学部准教授 田澤 実
法政大学キャリアデザイン学部キャリアアドバイザー 淡河由満子

1 はじめに

本稿の目的は、法政大学キャリアデザイン学部の体験型科目のひとつである「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を通じて学生のキャリア意識に向上が見られるのか検討することである。

2 問題と目的

(1) 科目の位置づけ

法政大学キャリアデザイン学部では、1年次にキャリアデザインに関する基礎を学ぶ。そして2年次から、「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の3つの領域に沿って、専門性を深めていく。これらは主に講義型の科目であるが、それ以外に、2年次からは、体験型選択必修科目がある。実践的なキャリアデザインのスキルを身につけるために学外でのインターンシップやフィールドワークなど、社会のさまざまな現場における実習を行うものである。この体験型選択必修科目のひとつが「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」である。

「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」のきっかけは、2006年度から文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログ

ラム（現代 GP）」（申請テーマ区分：実践的総合的キャリア教育の推進）の補助を受けたことであった（参照：「キャリア相談実習」ワーキンググループ、2009年）。その当時は、「キャリア相談事前指導」および「キャリア相談実習」という名称で必修科目として展開していた。その後、カリキュラムの変更に伴い、複数科目が展開されている体験型科目の一部と位置づけられ、選択必修科目となった。

(2) 科目の概要

前期の「キャリアサポート事前指導」では、まず、他者のキャリア形成支援に必要なソーシャルスキルを学ぶ。具体的には、傾聴や質問技法など「聴き方」、自分が我慢するだけでも、自分の意見を押し通すだけでもないコミュニケーションのひとつである「アサーション」、グループでの話し合いを円滑に進めるための「ファシリテーション」、話し合いをまとめるための「KJ法」などである。これらを扱った後に、いくつかのグループに分かれ、最後に大学1年生を対象にしたワークショップ形式の教育プログラムを考案し、実施する。

後期の「キャリアサポート実習」では、高校生に対してキャリア教育プログラムを実施する。キャリア教育プログラムの内容は高校との打ち合

わせを通じて決める。プログラム内容は様々であるが、例えば、価値観ワークなどが行われることもある。全体の進行としてアドバイザーおよび司会を進行する学生がおり、高校生は5名×8グループ等に分かれる。それぞれのグループにキャリアサポート実習を履修している学生がファシリテーターとして関わる。この時には、高校生の話を聴き、グループの意見を引き出し、話し合いが進みやすいような雰囲気をつくるなどの役割を担う。当日の様子によってはある程度の即興性を求められることもある。このような実習の事前指導と事後指導を「キャリアサポート実習」の授業で行う。

なお、2018年度における各科目の到達目標は下記である。

●「キャリアサポート事前指導」の到達目標

- ・ 傾聴や質問技法を適切に使うことができる。
- ・ 初対面の対象者とかかわる実習において、リレーション（信頼関係）づくりができる。
- ・ アサーションの観点を取り入れたコミュニケーションができる。
- ・ ファシリテーションを活用し、グループでの話し合いを円滑に進めることができる。
- ・ 話し合いをまとめるために適切な手法を選択できる。
- ・ アイスブレイク、ワーク、振り返りという一連のプログラムの構成の仕方を理解する。

●「キャリアサポート実習」の到達目標

- ・ 実習時に高校生とかかわるためのファシリテーションができる。
- ・ ワークショップ形式のキャリア教育プログラムを考案し、実演ができる。
- ・ 高校には様々な文化があり、様々な考え方をしている高校生がいることを理解する。
- ・ 実習時において高校生とかかわり続けるための物の考え方を知る。
- ・ 多様な他者の価値観を尊重したうえで、多様な人々と主体的にかかわる。

(3) 授業の体制

2017年度は、5クラス展開であり、担当教員は4名であった（複数のクラスを担当した教員が含まれる）。

前期は「キャリアサポート事前指導」、後期は「キャリアサポート実習」であり、学生は両者をセットで履修した。受講したのは主に2年生であった。1クラスあたり20名前後という履修制限が設けられた。

なお、授業を運営するメンバーには担当教員だけでなく、キャリアアドバイザー（キャリアデザイン学部の専属職員）が含まれる。また、学生サポーター（前年度に同授業を履修し、その後も継続的に実習の手伝いをする学生等）が参加することもあった。

(4) 授業スケジュール

年度によって授業スケジュールは一部変更している。ここでは2016年度の例を紹介する。前期に行われる「キャリアサポート事前指導」のスケジュールを示す（表1）。

第1回はガイダンスであった。授業の概要を説明し、学生の自己紹介等を行った後に「コミュニケーション」として「聴き方」に焦点を当ててワークをした。

第2回から第4回は引き続き、傾聴、FELOR、質問技法などの「聴き方」を扱った後、「アサーション」を学び、ワークを行った。

第5回から第7回は「グループワークのスキル」を扱った。グループでの話し合いの技法である「ファシリテーション」などに焦点を当てて、以下のワークをした。

第8回から第13回は「キャリア教育プログラムの作成および発表」を扱った。これまでに扱った内容（傾聴、FELOR、質問技法、アサーション、ファシリテーション、KJ法等）を応用してグループでの話し合いを行った。複数の回にまたがり、同一のメンバーで話し合いを継続させながら大学1年生向けのキャリア教育プログラムを作成し、プレゼンテーション、および実演した。第

12回と第13回は、第14回のための準備として位置づく。

第14回はキャリアデザイン学部1年生の春学期の必修科目「基礎ゼミ」と連携し、1コマ（90分）を実習に当てた。学生は、4名程度のグループを

編成して「基礎ゼミ」の教室に入り、ワークショップ形式で行われるキャリア教育プログラムを実施した¹⁾。

第15回はまとめと振り返りであった。

表1 「キャリアサポート事前指導」のスケジュール

1	ガイダンス	授業概要説明、CAVT 回答（第1回）、「聞く」と「聴く」のワーク
2	コミュニケーション①	傾聴のワーク
3	コミュニケーション②	質問技法のワーク
4	コミュニケーション③	「頼む」「断る」を題材にしたアサーションのワーク
5	グループワークのスキル①	ファシリテーション（アイスブレイク、ブレインストーミング）
6	グループワークのスキル②	KJ 法を活用した話し合い
7	グループワークのスキル③	傾聴、アサーション、ファシリテーションなどを活用した話し合い
8	キャリア教育プログラムの作成①	ワールドカフェを活用した話し合い
9	キャリア教育プログラムの作成②	企画案づくり、プレゼンテーション
10	キャリア教育プログラムの作成③	キャリア教育プログラム作成（前半）
11	キャリア教育プログラムの作成④	キャリア教育プログラム作成（後半）
12	キャリア教育プログラムの発表①	完成したプログラムの発表
13	キャリア教育プログラムの発表②	プログラムのリハーサル
14	キャリア教育プログラムの実施	作成したプログラムを学部1年生に実施
15	まとめと振り返り	授業の振り返り、CAVT 回答（第2回）

後期に行われる「キャリアサポート実習」のスケジュールを示す（表2）。実習先の高校内で高校生に対してキャリア教育プログラムを実施した。実習先の高校は3校あり、学生は2校で実習をした。これらの実習前には事前指導、実習後には事後指導を行った。

第1回はガイダンスであった。授業概要の説明の後、春学期のキャリアサポート事前指導の振り返りをした。

第2回から第5回は、一つ目の高校での実習を前にキャリア教育プログラムを作成し、最後に実演した。

第6回から第11回は、二つ目の高校での実習

の事前指導および事後指導であった。価値観ワークのリハーサル等を行った。実習後は、実習報告をワーク形式で行った。

第12回から第14回は、キャリア教育プログラムの作成および実演であった。実際に既存のプログラムの運営を補佐する立場で実習を行ったあとであったため、それを修正するためにはどのような点に気を付ければよいのかということを話し合い、実習で関わった高校生の特徴を踏まえたキャリア教育プログラムを新たに作成した。最後にそれを実演した。

第15回は、キャリアサポート実習の授業の振り返りをした。

表2 「キャリアサポート実習」のスケジュール

1	ガイダンス	授業概要説明、キャリアサポート事前指導の振り返り
2	キャリア教育プログラムの作成①	班ごとにキャリア教育プログラムを作成する①
3	キャリア教育プログラムの作成②	班ごとにキャリア教育プログラムを作成する②
4	キャリア教育プログラムの実演①	作成したキャリア教育プログラムを実演も交えて発表する①
5	キャリア教育プログラムの実演②	作成したキャリア教育プログラムを実演も交えて発表する②
6	実習リハーサル①	実習に向けてリハーサルを行う（前半）
7	実習リハーサル②	実習に向けてリハーサルを行う（後半）
8	実習リハーサル③	実習に参加する学生全体で最終リハーサルを行う
9	実習	高校に出向いて、生徒に対してキャリア教育プログラムを行う
10	実習報告ワーク①	実習の事後指導として実習の報告をワーク形式で行う①
11	実習報告ワーク②	実習の事後指導として実習の報告をワーク形式で行う②
12	あらたなキャリア教育プログラムの作成①	実習で関わった高校生の特徴を踏まえたキャリア教育プログラムをあらたに作成する①
13	あらたなキャリア教育プログラムの作成②	実習で関わった高校生の特徴を踏まえたキャリア教育プログラムをあらたに作成する②
14	あらたなキャリア教育プログラムの実演	作成したプログラムを実演する
15	まとめと振り返り	授業の振り返り、2分間スピーチ、CAVT 回答（第3回）

(5) 目的

本稿では、「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を通じてキャリア意識の向上が見られるのか検討することを目的とする。

なお、すでに梅崎・田澤（2013）において、旧名称の「キャリア相談実習」を通じてキャリア意識の向上が見られることを確認しているが、本稿では、授業内容等に一部変更をした「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を対象にしても同様の結果が再現されるかについて検証する。

3 方法

(1) 対象者

2016年度および2017年度にキャリアサポート事前指導およびキャリアサポート実習を履修し、以下の3時点の調査にすべて回答した大学生155名（男性：79名、女性76名）であった。学年の

内訳は2年生148名、3年生7名であった。本稿では2016年度および2017年度のデータを合算して分析をしていくことにする。

なお、学部では複数の体験型選択科目が展開されているが、受講した学生はこの中から「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を選択した者であった。学部のガイダンスを受けた後に提出する履修希望申請書には、「ソーシャルスキルを学ぶことにより、コミュニケーションの苦手さを解消したい」や、「高校生に対するキャリア教育やキャリア形成支援に関心がある」といった内容などが書かれていた。

(2) 調査時期

以下の3時点でアンケートへの回答を求めた。なお、第1回は、キャリアサポート事前指導の初回の授業に、第2回は、キャリアサポート事前指導の最終回の授業、または、キャリアサポート実習の初回の授業に、第3回はキャリアサポート実習の最後の授業に該当する。

● 2016年度

(第1回：2016年4月、第2回：2016年7月または9月、第3回：2017年1月)

● 2017年度

(第1回：2017年4月、第2回：2017年7月または9月、第3回：2018年1月)

(3) 用いた質問項目

下村・八幡・梅崎・田澤(2013)によるキャリア意識の発達に関する効果測定テスト(キャリア・アクション・ビジョン・テスト:CAVT)を用いた。同尺度は、人に会ったり、様々な活動に参加したりすることを示す「アクション」(「学外の様々な活動に熱心に取り組む」「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」など合計6項目)と、将来に向けた夢や目標、やりたいことなどをいかに明確にしているかを示す「ビジョン」(「将来のビジョンを明確にする」「将来の夢をはっきりさせ目標を立てる」など合計6項目)から構成されている。5件法(「5点：かなりできている」～「1点：できていない」)で回答を依頼した。梅崎・田澤(2013)によって、CAVTは、学業成績、エントリーシートの提出数など就職活動量、内定取得数、就職内定先に対する満足感との関連が明らかになっており、妥当性が確認されている。以

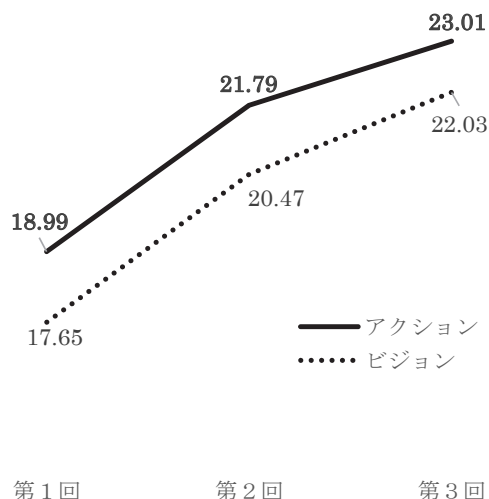
降の分析では、下位尺度ごとの合計得点(それぞれ、アクション得点、ビジョン得点)を用いることにする。

4 結果と考察

(1) 全体の結果

調査時期(第1回、第2回、第3回)を独立変数、CAVTの下位尺度(アクション得点、ビジョン得点)を従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、主効果は有意であった(それぞれ、 $F(2,308)=96.46$ $p<.01$ 、 $F(2,308)=89.47$ $p<.01$)。調査時期ごとのアクション得点およびビジョン得点の平均を示す(図1)。平均値間の差の検定(Bonferroniの方法)によれば、すべての調査時期の間で有意な差がみられた(第1回<第2回、第2回<第3回、第1回<第3回)。これらの結果は、前期の「キャリアサポート事前指導」の授業開始時からの授業終了時、また、前期の「キャリアサポート事前指導」の授業終了時から後期の「キャリアサポート実習」終了時にかけて、学生は、キャリア形成に向けた積極的な活動をできていると感じるようになり、また、将来に向けた夢や目標などを明確にできていると感じるようになったことを示唆している。

図1 調査時期ごとのアクション得点およびビジョン得点の平均



(2) プロットシートの活用例

上記までは、授業全体を通じて、キャリア意識がどのように伸びるのかを示すものであった。以降は、それぞれの学生が個人で行っているプロットシートの活用について述べる。

学生はそれぞれの回において、アンケートに回答した後に Appendix に示したようなプロットシートを記入した²⁾。第2回は、キャリアサポート事前指導の振り返り、第3回はキャリアサポート事前指導とキャリアサポート実習の振り返りを授業では行ったが、その際に、自分のアクション得点およびビジョン得点がどのように変化したか(または変化しなかったか)も含めて、振り返りをした。そして、授業内では、学生一人一人が他の学生に向けて自らの振り返りについて口頭発表をした。

レポートで必ずしも多くを書かない学生でも、口頭で発表すると、より多くの内容が語られることがあった。書くか話すかという単純な負担の違いの影響もあるかもしれないが、他者の発表を聞いて、自分の発表にも付け足して伝えたくなったり、口頭で発表しながらもその場で考えたことが出てきたのかもしれない。

以下には、2名の学生(ともに女性、2年生)のプロットシートの例を見ていくことにする。

まず、女性 A の事例を示す(図2)。横軸がアクション得点、縦軸がビジョン得点を示している。第1回(4月)では、アクション8点、ビジョン8点であった。第2回(9月)ではアクション12点、ビジョン11点であった。第1回から第2回にかけてプロットは右上方向にやや移動している。すなわち、アクション、ビジョンともに上昇したのが分かる。第3回(1月)では、アクション25点、ビジョン29点であった。第2回から第3回にかけてプロットはさらに右上方向に移動している。すなわち、アクション、ビジョンともに大幅に上昇したのが分かる。

女性 A はこのような CAVT (アクション得点およびビジョン得点) の変化と合わせてどのように振り返っているのだろうか。第2回(9月)

の振り返りと、第3回(1月)の振り返りの内容³⁾を表3に示す。

第1回から第2回の変化については、実際の CAVT の伸び具合と女子学生の主観的な感覚は必ずしも一致していないようであった。アクション得点の伸びについては、アルバイトと関連づけながら解釈しているが、ビジョン得点の伸びについては、伸びてはいるものの主観的にはまだ行動はできていないので、これから行動していきたいという自己評価であった。第2回から第3回の変化については、高校で行った実習と関連づけて振り返りをしていた。相手の反応を見ながらラポールを形成していった経験によって、女子学生は、コミュニケーション能力が向上したと捉えていた。アクションもビジョンも大幅に伸びていたことと本人の主観的な感覚が一致したようであった。

次に、女性 B の事例を示す(図3)。第1回(4月)では、アクション26点、ビジョン25点であった。第2回(7月)ではアクション25点、ビジョン22点であった。第1回から第2回にかけてプロットは左下方向にやや移動している。すなわち、アクション、ビジョンともにやや下降したのが分かる。第3回(1月)では、アクション17点、ビジョン23点であった。第2回から第3回にかけてプロットはさらに左方向に移動している。すなわち、アクションは大幅に下降したものの、ビジョンはわずかに上昇したのが分かる。

続けて、女性 B の第2回(7月)の振り返りと、第3回(1月)の振り返りの内容³⁾を表4に示す。第1回から第2回の変化については、アクションもビジョンもわずかに下降していた。前期の「キャリアサポート事前指導」におけるキャリア教育プログラムの作成および実演のためにチームで取り組んだことの振り返りをしていた。第2回から第3回の変化については、「違う立場の人達」と関係性を築くことの難しさや、チームで臨む面白さなどが振り返りであらわれていた。第2回において「自分はバーツと言える人間」であったが、「チームで臨む面白さを学んだ。一人でできることな

図2 女性Aのプロットシート

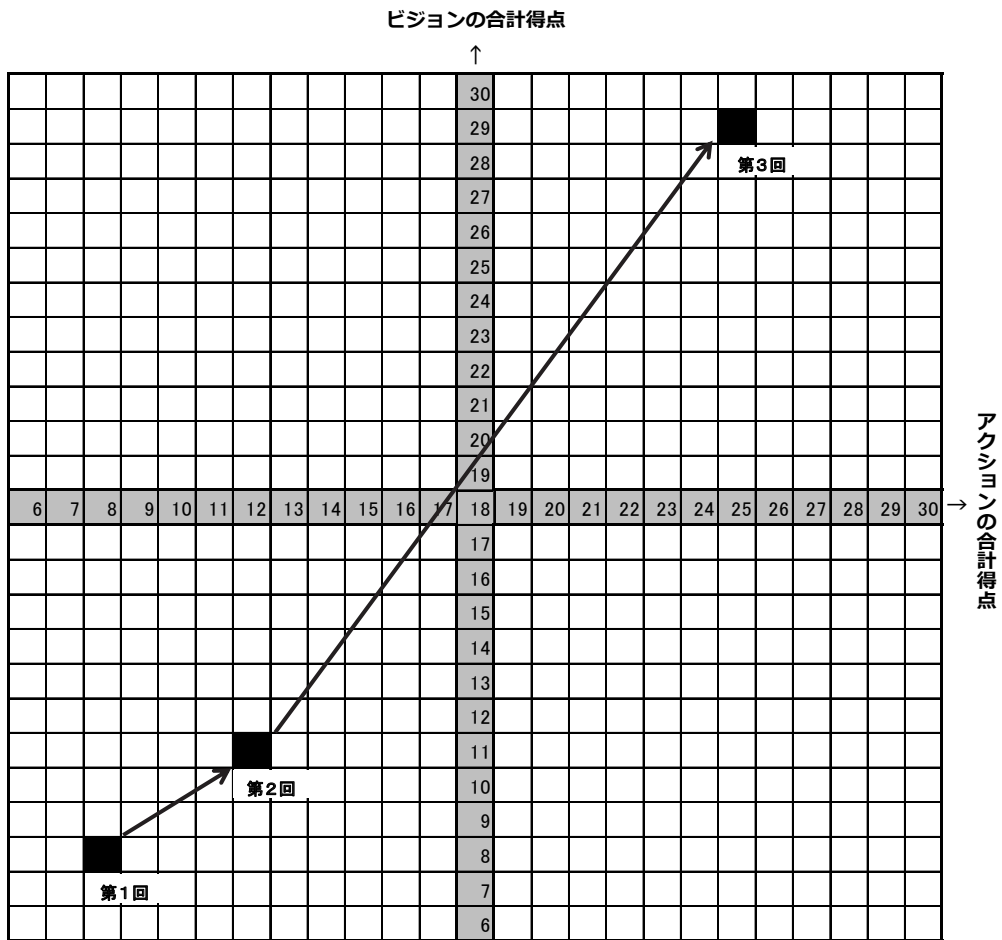


表3 女性Aの振り返り

第2回(9月)の振り返り	第1回から第2回の変化について (アクション：8点⇒12点、ビジョン：8点⇒11点) アクションが伸びていたのは、アルバイトなどの影響かもしれない。ビジョンについては、キャリアを明確にするために行動はしていない。今後、調べて行動してみたい。
第3回(1月)の振り返り	第2回から第3回の変化について (アクション：12点⇒25点、ビジョン：11点⇒29点) 高校での実習で、話しかけても反応の薄い生徒が何人かいた。話しかけるのに苦労したが、相手の見方を変えてみるようにした。怒ったり、面倒くさいとかではなく、慣れていないだけなのだ。そこで、最初から本題に入るのではなく、身近なことを話したりしてから、徐々に距離を縮めた。自分の発する言葉や態度で他者に何か気づきを与えることができるのだと感動した。コミュニケーションの取り方1つで、こんなにも物事が意味のあるものになっていくのかと思い知らされた。確実にコミュニケーション能力は向上したと思う。自分の振舞いひとつで、相手の自分に対するかわりも変わってくると気づかされた。これからもコミュニケーションを大切にしていこうと思う。

ど、たかが知れてる」と述べるように、個人でできることから集団でできることへと視点が変わっていったことが考えられる。

授業を通じて、アクションが下降したことについては、第3回の振り返りで「違う立場の人達」への言及があることと関連があるかもしれない。アクションは人に会ったり、様々な活動に参加し

たりすることを示すものであり、具体的な項目には「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」「様々な人に出会い人脈を広げる」「様々な観点から物事を見られる人間になる」などがある。視野の広がり等で、まだまだ会うべき人や参加すべき活動等が存在することに気がついたのかもしれない。

図3 女性Bのプロットシート

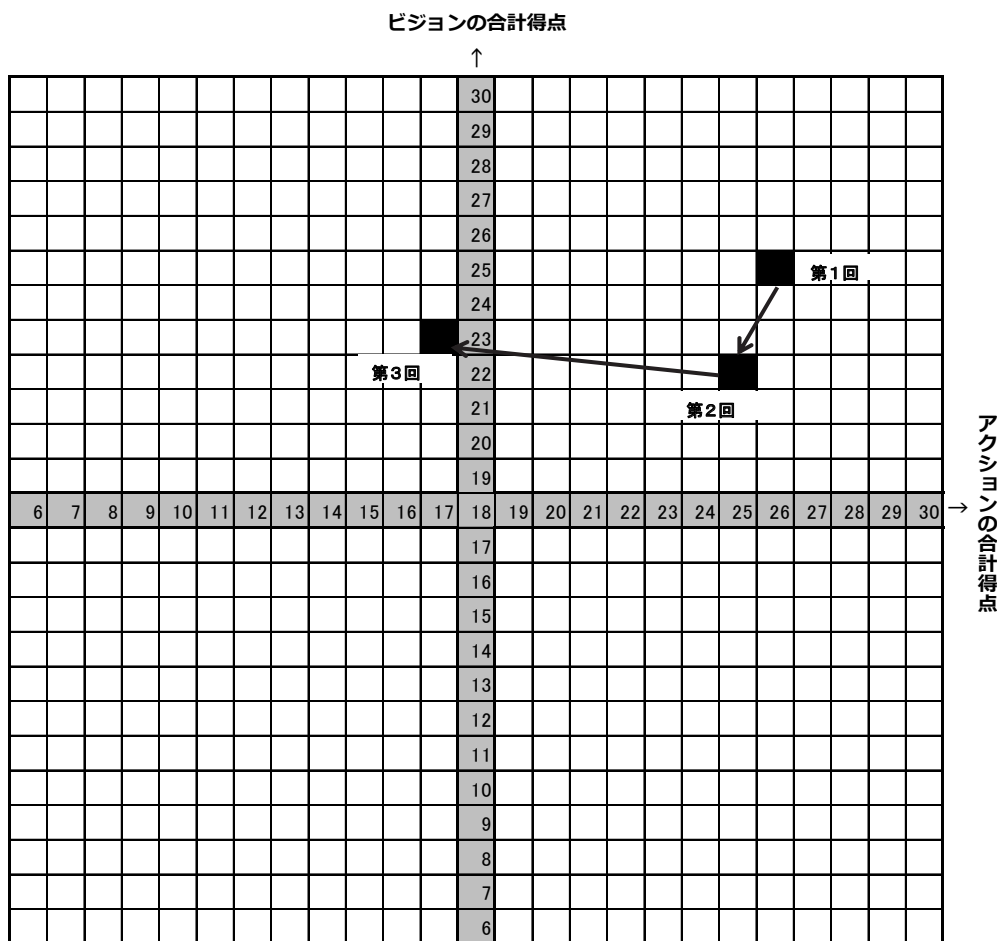


表4 女性Bの振り返り

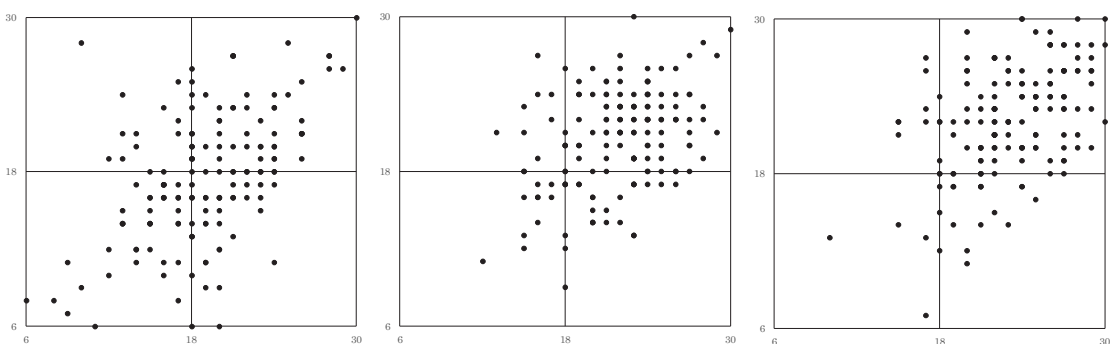
第2回(7月)の振り返り	第1回から第2回の変化について (アクション：26点⇒25点、ビジョン：25点⇒22点) 新しいものを作るのが難しかった。目標やねらいは決められるが、それに向けたプロセスを作るのが大変だった。いままでは、自分はパーッと言える人間であった。しかし、みんなの意見を取り入れながら、役割を振りながらやるのが大変だった。それも学びと思った。今後は、皆に頼ることも大事だし、うまく振るのも大事と思った。
第3回(1月)の振り返り	第2回から第3回の変化について (アクション：25点⇒17点、ビジョン：22点⇒23点) この授業を通してチームワークの楽しさを新たに学んだ。もともと履修した理由は実習に行くことができるからであり、正直実習に行くまでの過程を重視していなかった。何一つ自分だけでできることはなく、チームで作る面白さ楽しさ大変さを学んだ。 計3回実習をし、「違う立場の人達との関係性を築くことの難しさ」また、「コミュニケーション能力は違う立場の人たちとの関わりの中で高められる」という発見があった。限られた時間の中で、少しでも良好な関係性を築くためには、まず自分が心を開く、笑顔、傾聴の姿勢がいかに大切なのかが分かった。 この授業でチーム、グループにいる人たちの意見を聴く大切さ、さらに1つの事柄に対して、チームで臨む面白さを学んだ。一人でできることなど、たかが知れてるので、今後、チームで何かやる際に活かせられる。

(3) 学生の個人差

また、学生の個人差がどの程度あったのかを示すことも重要であろう。そこで、このプロットシート の枠組みを活用して、第1回、第2回、第3回のアクション得点とビジョン得点の散布図を示す

(図4)。第1回では、アクションもビジョンも18点以下(図の左下に該当)の者が一定数見られているが、第2回ではその数は減少し、第3回では、多くの者がアクションもビジョンも18点以上(図の右上に該当)にプロットされているのが分かる。

図4 アクション得点、ビジョン得点の散布図(左：第1回、中：第2回、右：第3回)



5 総合考察

(1) 全体の結果より

本稿の目的は、「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を通じてキャリア意識の向上が見られるのか検討することであった。その結果、授業の開始時から授業終了時にかけて、学生は、キャリア形成に向けた積極的な活動をできていると感じるようになり、また、将来に向けた夢や目標などを明確にできていると感じるようになったことを示唆した。「キャリアサポート実習」の旧名称である「キャリア相談実習」については梅崎・田澤（2013）では、授業を通じてキャリア意識が向上することを示したが、授業内容を一部変更した「キャリアサポート実習」でも結果が再現されることを確認した。また、本稿では、梅崎・田澤（2013）のような後期の「キャリアサポート実習」(旧名称:「キャリア相談実習」)の前後の2時点比較ではなく、前期の「キャリアサポート事前指導」の授業開始時点も含めた3時点比較をすることにより、前期の「キャリアサポート事前指導」の授業を通じてキャリア意識が向上することを新たに明らかにした。

なお、本稿では「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を受講している学生のためのデータで分析を行ったが、効果検証のためには、同時期に「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を受講していない学生のデータとの比較が必要であろう。平尾（2017）はCAVTを用いて、実験群と統制群を設けて比較し、キャリア教育を受けた実験群の方が統制群よりもアクション得点もビジョン得点も高いことを示した。ただし、平尾（2017）が「今回、大人数が受講する必修授業において、選択バイアスの問題を解決してくれる外生的なクラス分けが行われ、前半クラスの最後と後半クラスの最初が重なりながらも同じ教育内容が連続する違う時期に教授されているという自然実験環境の発見と利用を行うことができた（p.8）」と述べているように、様々な条件が揃わないと実験群と統制群を設

けた比較は調査実施が実現できない。キャリアデザイン学部では、2年生以上が体験型選択必修科目を履修するため、仮に「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を受講していない学生のデータが利用できたとしても、他の体験型選択必修科目を履修した効果がみられる可能性もある。

(2) プロットシートの活用例より

本稿では、プロットシートを活用した体験型科目の振り返りの事例を示すことができたことも一つの意義であろう。上述したように、クラス全体のデータからは、「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」を通じてCAVTが上昇することを確認できた。しかし、個別のデータを見てみると、CAVTが上昇した例（女性A）だけではなく、CAVTが下降した例（女性B）も存在していた。このことに関連して、五十嵐（2008）は、以下のように述べている。

評価の際に注意したいのは、右肩上がりの変化をよしとしないことである。固定的な進路展望をもって入学してきた学生が、キャリア教育によって再吟味と再構築のプロセスを歩むのであれば、混乱や危機を経ることこそ教育効果といえるからである（p.115）

「キャリアサポート事前指導」および「キャリアサポート実習」は主に2年生が受講していた。2年生は大学生としての過去と大学生としての未来を持つ存在である。大学1年生としての学生生活の経験を有しながらも、3、4年生のような進路選択に向けた活動を伴わずにこれから大学生活をどのように送るか考えることのできる時期でもある。この時期固有の再吟味や再構築のプロセスがあるのかもしれないが、これを確認するには他学年との比較が必要である。

また、キャリア意識の効果測定は、調査者が配布と回収をする形式でデータ収集をする場合、調

査者はデータ分析時にその変化があることを知ることができるが、回答者である学生自身は前回の回答を覚えていないことが予想される。そのため、もしCAVTに向上が見られていても、本人は自覚していないかもしれない。そこで、Appendixに示すように調査用紙への回答を依頼するだけでなく、学生自身にプロットシートに記入してもらうことにより、なぜこのような変化が見られたのかについて内省を促せる可能性がある。たとえば、第2回(7月または9月)のCAVT実施時であれば、4月から自分はどのように変化したのかを考えることになる。前期の「キャリアサポート事前指導」を受講する以前の自分を想起することもある。第3回(1月)のCAVT実施時であれば、後期の「キャリアサポート実習」で学んだことも合わせて振り返ることになる。紋切り型の表現で浅い考察で授業レポートを終わらせないためにも、このような自らの回答結果の推移を視覚化することは一定の意義があると思われる。

注

- 1) 大学1年生を対象にしたワークショップ形式で行われるキャリア教育プログラムの事例については、田澤・淡河・木内(2017)に詳しい。
- 2) このプロットシートは田澤(2015)に若干の改良を加えたものである。
- 3) なお、これらのデータは授業で行った口頭発表による振り返りをテキスト化したものを含む。

(注：各学生の口頭発表時に筆者はノートパソコンを使ってメモを取っていた)。口頭発表は内容が大きく変わらないように留意しながら、順序の入れ替え、語尾の修正などが施されている。

引用文献

- 平尾智隆 2017「キャリア教育が大学生のキャリア意識に与える影響—実験的環境下での計測—」『NIER Discussion Paper Series』No. 6.
- 五十嵐敦 2008「大学におけるキャリア教育の実践」日本キャリア教育学会(編)『キャリア教育概説』東洋館出版社 p.112-115.
- 下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 2013「キャリア意識の測定テスト(CAVT)の開発」梅崎修・田澤実(編)『大学生の学びとキャリア—入学前から卒業までの継続調査の分析—』法政大学出版局 p.17-40.
- 田澤実 2015「大学におけるキャリア意識の発達に関する効果測定テスト(CAVT)の活用事例：学生が自らのキャリア意識の発達を知るツールとして」『進路指導』88(1), p.13-22.
- 田澤実・淡河由満子・木内葉月 2017「学生が実施するキャリア教育プログラムとしてのワークショップ～「キャリアサポート実習」の実践～」『生涯学習とキャリアデザイン』14(2), p.103-118.
- 梅崎修・田澤実 2013『大学生の学びとキャリア：入学前から卒業後までの継続調査の分析』法政大学出版局.

Appendix プロットシート

学生証番号 _____

氏名 _____

キャリア意識の発達に関する効果測定テスト

(キャリア・アクション・ビジョン・テスト : CAVT)

このアンケートは、体験型科目の効果が、どのような側面にどの程度見られるのかを測定するために作成しました（詳細は梅崎・田澤（2013）参照¹）。なお、ここで回答したことと成績は関係しません。思った通りに回答してください。

第1回測定用

回答した日： _____ 年 _____ 月 _____ 日

あなたは、現在、以下のようなことが、どの程度、できていると感じますか。

あてはまる箇所に○をつけて回答してください。

	そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ な い	ど ち ら と も 言 え な い	や や そ う 思 う	そ う 思 う
1 将来のビジョンを明確にする	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
2 学外の様々な活動に熱心に取り組む	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
3 将来の夢をはっきりさせ目標を立てる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
4 尊敬する人に会える場に積極的に参加する	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
5 将来、具体的に何をやりたいかを見つける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
6 人生に役立つスキルを身につける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
7 将来に備えて準備する	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
8 様々な人に出会い人脈を広げる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
9 将来のことを調べて考える	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
10 何ごとにも積極的に取り組む	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
11 自分が本当にやりたいことを見つける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
12 様々な観点から物事を見られる人間になる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5

項目 2、4、6、8、10、12 の合計 ⇒ _____ 点 （アクションの合計得点）

項目 1、3、5、7、9、11 の合計 ⇒ _____ 点 （ビジョンの合計得点）

¹ 梅崎修・田澤実（編）2013『大学生の学びとキャリア：入学前から卒業後までの継続調査の分析』法政大学出版局。

第2回測定用

回答した日： 年 月 日

あなたは、現在、以下のようなことが、どの程度、できていると感じますか。

あてはまる箇所に○をつけて回答してください。

	そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ ない	ど ち ら と も 言 え ない	や や そ う 思 う	そ う 思 う
1 将来のビジョンを明確にする	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
2 学外のような活動に熱心に取り組む	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
3 将来の夢をはっきりさせ目標を立てる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
4 尊敬する人に会える場に積極的に参加する	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
5 将来、具体的に何をやりたいかを見つける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
6 人生に役立つスキルを身につける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
7 将来に備えて準備する	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
8 様々な人に出会い人脈を広げる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
9 将来のことを調べて考える	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
10 何ごとにも積極的に取り組む	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
11 自分が本当にやりたいことを見つける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
12 様々な観点から物事を見られる人間になる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5

項目 2、4、6、8、10、12 の合計 ⇒ _____ 点 (アクションの合計得点)

項目 1、3、5、7、9、11 の合計 ⇒ _____ 点 (ビジョンの合計得点)

第3回測定用

回答した日： 年 月 日

あなたは、現在、以下のようなことが、どの程度、できていると感じますか。

あてはまる箇所に○をつけて回答してください。

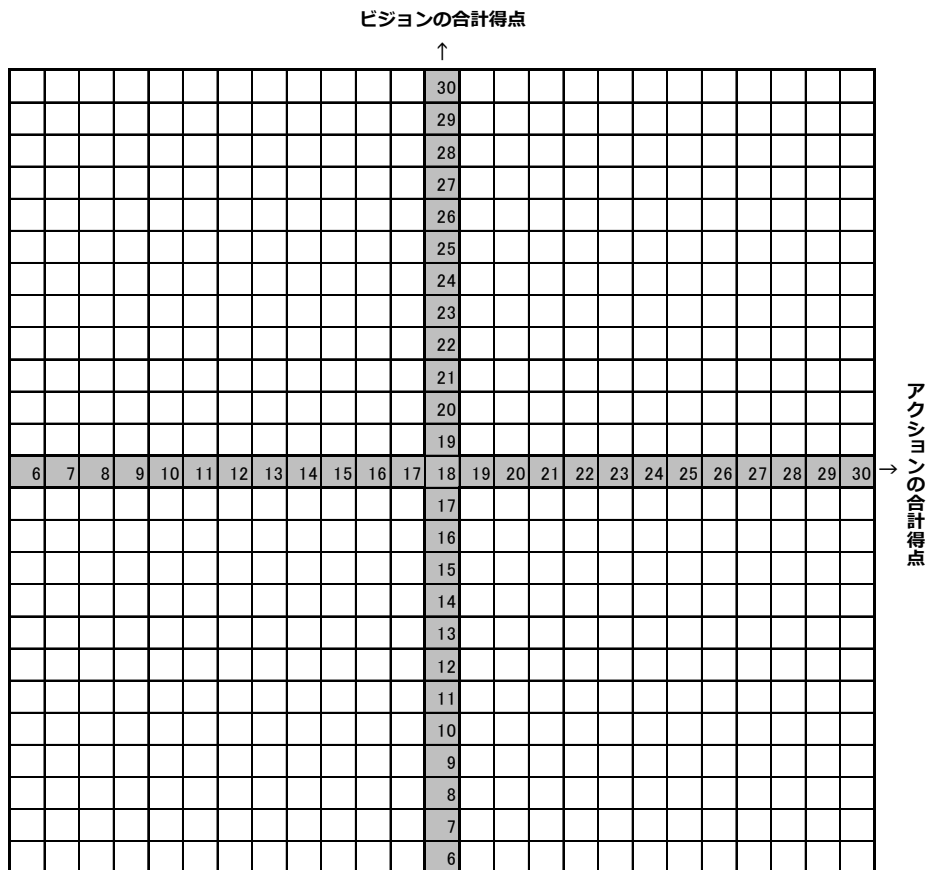
	そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ ない	ど ち ら と も 言 え ない	や や そ う 思 う	そ う 思 う
1 将来のビジョンを明確にする	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
2 学外の様々な活動に熱心に取り組む	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
3 将来の夢をはっきりさせ目標を立てる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
4 尊敬する人に会える場に積極的に参加する	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
5 将来、具体的に何をやりたいかを見つける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
6 人生に役立つスキルを身につける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
7 将来に備えて準備する	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
8 様々な人に出会い人脈を広げる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
9 将来のことを調べて考える	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
10 何ごとにも積極的に取り組む	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
11 自分が本当にやりたいことを見つける	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5
12 様々な観点から物事を見られる人間になる	1 ...	2 ...	3 ...	4 ...	5

項目 2、4、6、8、10、12 の合計 ⇒ _____ 点 (アクションの合計得点)

項目 1、3、5、7、9、11 の合計 ⇒ _____ 点 (ビジョンの合計得点)

プロットシート

1. 各回の「アクションの合計得点」と「ビジョンの合計得点」を求めてください。
2. 横軸に「アクションの合計得点」、縦軸に「ビジョンの合計得点」として該当する箇所の四角 (□) を塗りつぶしてください。そして、その付近に「第1回」「第2回」「第3回」というように該当する回を記入してください。
3. 第1回、第2回、第3回の塗りつぶした四角 (■) を矢印でつないでください。



記入例



第1回（アクションの合計21点、ビジョンの合計15点）

第2回（アクションの合計23点、ビジョンの合計20点）

Improvement in Career consciousness through an Experience-type subject at University — Focusing on “Career Support Training” course —

TAZAWA Minoru
OGOH Yumiko

Changes in career consciousness of university students resulting from a “Career Support Training” course, which is an experience-type subject, were examined. University students (N=155) that took the course responded to the Career Action-Vision Test (CAVT, Shimomura et al., 2013) in the early, middle, and latter period. The results

indicated that both CAVT action and vision scores increased significantly from the early to the middle, and from the middle to the latter period. Moreover, examples of practice using a CAVT plot sheet were introduced based on the case of a student with increased CAVT scores and the case of a students with decreased CAVT scores.